

インターアクト リーダーシップフォーラム

インターアクト委員会

2018年10月21日(日)に大阪府河内長野市にある清教学園において、IAC リーダーシップフォーラムを開催しました。

目的 各インターアクトクラブのリーダー・次期リーダーが集まり、今後のクラブを担うにあたっての有益な学びを得ることが、リーダーシップフォーラムの目的である。

手法 世界の貧困の問題をテーマにして、問いをたてる方法を学ぶ。この手法は『たった一つを変えるだけ:クラスも教師も自立する「質問づくり」』Dan Rothstein Lus Santana著(2011年・新評論)をベースにしている。

活動内容 冒頭に「質問を考えながら報告を聞く」ことを伝え、清教生によるセブ島でのボランティアツアーの報告を聞く。聞きながらメモを取っているアクターが多く見られた。その後、4人～5人の班にわかれる。班で1枚のワークシートを回し、出来るだけ沢山の質問を書き出していく(最大26項目)。他者の評価を気にして質問を躊躇したり、変更したりさせないために、この時は質問についての相互評価を一切してはならない。一定の時間のあと、出された質問を全員で吟味する。「自分で調べればわかる」質問、「既に答えが語られていた」質問などをチェックしていき、最終的に「発話者の体験を共有するために最適な」質問を3項目選び、優先順位をつける。ここまでが午前中の活動である。

昼食時に発話者がワークシートに目を通し、午後に各班に発話者1人が合流して、優先順位の高い質問から順番に答えていく。ここでの目的は「体験の共有」にあるので、話題が質問内容から徐々に展開していっても、これを妨げない。途中で「質問リバーズ」の時間を設け、発話者が逆に「何故この質問をしたのか」を質問する。これは「質問する側にも、その質問をするに至る背景が存在する」ことを理解するためである。

最後に「すぐには答えが出ないが、今後考え続ける意義がある『問題意識としての問い』」を班で話し合い、これを代表者が発表して共有した。

結果 リーダーの意識が高い生徒が参加していることもあり、活発な対話の場となった。講演などで他者の話を聞く機会の多いインターアクトにとっては、受身にならず、主体的に人の話を聞く姿勢は必須である。「聞かなければならない」という気持ちの問題だけではなく、今回のように一つの手法によって、より活発な対話の場が共有できるという体験は、有意義なものであったのではないだろうか。

(文責：清教学園インターアクトクラブ顧問 山本 志保)

